



ばら 遍 歴

伊 藤 克 三*

ばらの花に魅せられ、「ばらの家」を目指してこの家に移ってからもはや30年になります。当初は若輩であった私も庭のばらとともに年をとり、5年前に阪大を定年退官しました。

退官に際し、同学の知友、卒業生が私のために記念事業として記念出版をしてくれることになりました。記念出版といえば、当人の専門領域のものというのが通例ですが、私はこのご好意に甘え、これを機に多年の念願であるばらの本を作り、これを本記念事業に協賛していただいた方々に贈ることによって、このご厚意に報いるとともに、ばらの美しさ、ばら作りのすばらしさを知っていただくことにしました。

「ビルゴ礼讃」と題したこの本を出版するに当たっての私の気持を、そのはしがきに次のように書き記しました。

「今日までの30余年にわたる私の生活は絶えず三本の大きな柱に支えられてまいりました。最も力強い柱は申すまでもなく、大学における公的な生活をめぐる周囲の方々の温いご理解とご援助であり、次いで、家庭内での私的な生活を支えてくれました妻の惜しめない助力であります。残るいま一つの柱が愛培する庭のばらであったと申すことができます。仕事の中で、あるいは家庭での人との繋がりから全く離れた私個人の生活を支え、四季にわたり私の心に豊かな潤いと充実感を与えてくれたものが庭のばらたちであります。

こうした長いばらとの生活の中で私の得てきたものを何らかの形でまとめておきたい、というのがかねてより私の抱いていた夢でありました。このたびの定年退官を機に、はからずも、この夢がここに「ビルゴ礼讃」となって叶えら

れましたことは、私にとりましてこれに過ぎる喜びはございません。至らぬ私に賜りましたみなさまのご芳情にはただただ感謝感激の至りでございます。心より厚く御礼申しあげます。

書名にありますビルゴとは、その名のとおり清らかな乙女を思わせる気品に満ちた清純無垢の白ばら、私の最も愛惜するばらであります。このばらの名のもとに、折にふればらに寄せる私の思いを書き記し、あるいはフィルムに収めてまいりましたものを、私なりに一冊の書に編集いたしましたのがこの「ビルゴ礼讃」であります。さてとなれば、ばらには気の毒と思える写真、面映ゆい文章、あるいは内容の重複が目立ちお恥かしい次第ですが、これによって、私のみなさまへの感謝の気持の幾分かとともに、ばらの持つ深い味わいの僅かなりともお伝えできますれば、私の幸これに過ぎるものはありません。もの言わぬ庭のばらたちにもなりかわり厚く御礼申しあげます。

最後に、これまでの私の家庭生活を支えてくれました妻への感謝の気持と、あわせて、みなさまのご厚情を妻にも分つ気持をこめまして、本書を妻、俊子に捧げたいと存じます。よろしくご了承の程お願い申しあげます。

花のカラー写真16頁を含む218頁の「ビルゴ礼讃」は祝賀会ま近によりやくでき上り、祝賀会当日来会者の方々に贈ることができました。

祝賀会は5月のばらの季節にあわせて日を設定、ばら仲間呼びかけていただきましたところ、関西ばら人の大方の方々のご参加を得て、ご丹精の見事なばらの花で会場を飾っていただきました。会場中央に並べられた数台の大きなテーブルには大輪種、中輪房咲種、ミニチュアの色とりどりの花が溢れるばかりに展示され、ばら展会場を凌ぐ豪華さに、私はばら同好の方々のご厚意に感謝するとともに、ばら作りの

*伊藤克三(Katsuzo ITO)、摂南大学工学部、建築学科、教授、工学博士、建築環境工学、大阪大学名誉教授

歓びに心の躍る思いでした。

開宴に先立ち、別に用意された講演会場で、スライドを交えながら「ばらを語る」時間も取っていただき、私のばらに抱くイメージを聞いていただきました。大きなスクリーン一杯に映し出される愛培花の華麗な姿に私自身が陶醉し、いつの間にか予定の時間が過ぎていた有様でした。

咲き匂うばらに包まれ、ばら人をも交えてのパーティは文字通りのばらの宴、私も愛培のばらを数個の花器に盛り、特に書名のばらピルゴ10輪は展示台正面に飾り、その清楚な花容を参会者に観賞していただきました。このような機会に少しでも多くの方に、奥に秘められたばらの味わいを幾分なりとも知っていただけたとすればありがたいことでした。念願のばらの書を手し、多くの人々の温情とばらの色香につつまれて、恙なく退官を迎え得ましたことは何ものにも勝る幸、私の生涯の最良のひと時でありました。今も当日の写真アルバムを取り出しては当日のことをなつかしんでいます。

あれからはや5年、私のばら作りはいささかも変わるところはありません。難かしいというよりも非常に手間のかかるばら作り、自分ながらもよく続いているものと思います。

はじめた頃、たまたま近くにばら作りのベテランの方があり、そこの庭の立派なばらを見たのが私の本格的なばら作りへのスタートでした。まず、ばらの成育に適した土地を求めて今の場所に移ることにしました。当初は品種のもつ味など解らぬままに、あれこれと栽培する品種の選定に迷い、栽培方法に苦労しました。やがてばら展での入賞が重なるにつれ、益々ばら作りに熱が入り、自分なりに栽培方法にいろいろと工夫を加えた結果、私の庭のばらの低くコンパクトな樹形、汚れのない秋ばらが同好の人の注目するところとなりました。これは私のとったシュート（新梢）の処理の仕方とスリップスという1ミリほどの花を汚す虫の防除法とのもたらした結果であり、これらの方法は今日関西一円で広く用いられるところとなっています。私のばら界へのいささかの寄与と自負していることの一つです。

年数を重ね経験を積むほどに、ばらの花を見る眼が高められ、百輪の凡花よりも意に合った一輪の花にばら作りの深い歓びを見出し、ここに栽培の目標を置くようになりました。けれども、よい花は単純に栽培方法だけで咲くものでもないことも知らされました。気象条件が咲く花の質に非常に大きく影響するのです。同じように手入れをしても、毎年咲く花に差を生じます。しかも、この影響の強さが品種により異なり、これの甚だしい品種では、ある年にはどの花もすべてすばらしい花に咲く反面、年によればすべてが駄花に終ることがあるのです。中には何年かに一度、たまたま気象条件のあったときすばらしい花を見せるようなものもあります。私どものばら作りは、気候があえばいい花が咲きうるような状態に栽培管理することであって、咲くか咲かぬかは全くのところお天気にまかせといわねばなりません。ここに夢があって、園芸をより楽しくしているものと思います。

ばらの花は大きく、豪華なだけでは決していい花ではありません。私は何よりもばらに求めるものは、その花のもつ雰囲気です。清純なすがたで、やさしく、控え目に見る者に語りかけてくるようなばら、こんな花に年とともに強く惹かれるのです。単に色と形の外形だけではなく、その花の内にこもる味わい、格調に欠ければやがては飽きがきます。長年、作れば作るほどに愛情が深まり、いくら眺めていても見飽きることのない花、こんな花こそが銘花だと思っています。ばらには良花は少なくありませんが、銘花といえる品種となりますと、その品種は極めて限られたものになります。ばらを楽しむにはまずこうした品種の選定が大切です。

しかし、いくら満足のいく、すばらしい花を咲かせたにしろ、ばらの命は短く、観賞しうるのは精々半日、所詮ははかないばら作りです。何かこれにもっともらしい理屈づけがないかと考えた結果は、自分をばらの演奏家、演出家に見立てることでした。どのような名曲、名作であっても、それをすばらしく演奏、あるいは演出する者がいなければ音楽、演劇が鑑賞されえないように、すぐれた栽培家がいなくては、育種家の創り出した銘品種も、その花のよさを観

賞されることはできません。花の最高の美しさを追求するばら作りがあってこそ、人はばらの真の美しさを楽しむことができるのです。ばら展はばらの演奏会場、わがばら庭は私のばら作りの演奏、演出の舞台、このように考えると、はかないばら作りにも少しは意義づけをすることができました。

かつては、意に合った花を咲かせる喜び、これがばら展で入賞することによる喜び、これらが目標であった私のばら作りでしたが、年とともにわが庭を訪ねる人が増すほどに、庭に咲くばらの花に多くの人々が喜んでいただくことによる私の喜び、これが何にも勝るばら作りの喜びとなってきました。庭を舞台の私の演奏、演出が多くのお好みに好評を得ていることであり、これほど嬉しいことはないのです。どなたにも私の演奏を楽しんでいただくこと、五月の一ヶ月終日門を開いて庭を開放するようになってからはや十数年、この間は庭に人影のたえることはありません。

庭を開放すればばらが傷められはしないかと心配する方もいますが、それよりも、刺で顔や衣服を傷められはしないかと気をつかうのです。もともと、自分の通る細い通路しか取っていない狭いばらの庭のこととて、この頃は、少しでも通りやすいようにと剪定、整枝にも心を配っている次第です。

記憶に残るばら客も少なくありません。私の不在中に見えた目の不自由な老婦人から、お礼にかえてということで、次のような俳句が寄せられたことがありました。

花分けて白杖も通る薔薇の園

大輪の薔薇かかえ顔に花粉つけ

ばらの花の一輪一輪を両手でかかえてその形を探り、顔を寄せてその香りを賞でておられた様子がこの句から窺われ、こうして慈んでもらったばらたち、さぞ感激したこと、思いました。

一昨年春でした。すっかり暗くなった中を垣根越しに熱心にばらをご覧の中年のご夫婦が

ありました。よほどばらのお好きな方とお見受けし、他に来訪者もないままに、小一時間もかけて庭と畑を見て廻りましたが、この間、このご夫人、咲いているばらの一輪づつを両手で愛撫しながら、やさしく声をかけられるのです。

「よく咲いてくれたわね。ありがとう。えらかったわね。このままでいてほしいけど仕方がないね。また元気で咲いて頂戴ね。……」

一輪ごとに語りかけられるやさしい、いたわりの言葉に私は胸つまる思いでした。こうした方に、こうしたお礼と労わりの言葉をかけられたばらたちの喜びはいかばかりかと、ばらともども感謝の気持で一杯でした。ばらとの対話のできるばら作り。これが本当のばら作りだと思います。見る者に語りかけてくるばら、語りかけたくなるばら、こんなばらを求めてきた私のばら作りが、このご夫人の数々の言葉に確かな裏づけと力強い支えを得た思いでした。

記念出版のはしがきにも書きましたように、ばら作りは私にとって大きな心の支えでありました。苦しい時には勇気づけられ、辛い時には慰めを与えてくれました。私の愛情にはばらは正直に伝えてくれました。親しめば親しむほどに奥深い美しさ、嵩高な美しさを教えてくれました。咲いた花そのものによる喜びよりも、これが多くの人を喜ばせることによる、さらに大きな喜びのあることも知らされました。ばらを通しての幅広い交友からは、人の真情の数々に接することができました。ばら作りの冥加、ばらのもつ功德とっていいようにも思われるのです。何彼につけ、ばら、ばら、ばらで過ごしてきた自分のばら馬鹿ぶりを、半ば自嘲的に、半ば自己弁護的にばら教徒などといっては馬鹿の上塗りをしているこの頃です。

最後に、私の敬慕する今は亡きばらの歌人野上草夫さんの「ビルゴ」の歌一首で駄文を結ばせていただきます。

白薔薇のビルゴの花の真白さを
思ひひそめて吾は恋ふらく